〔大きな収穫〕のドラマがそこにある

生きた土をつくる

農薬・肥料

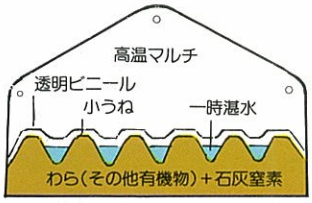
クニ印

石灰窒素

特約店

日本カーバイド工業株式会社

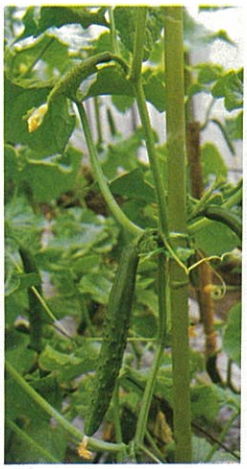
施設編



石灰窒素・太陽熱法――土壌消毒と土づくり

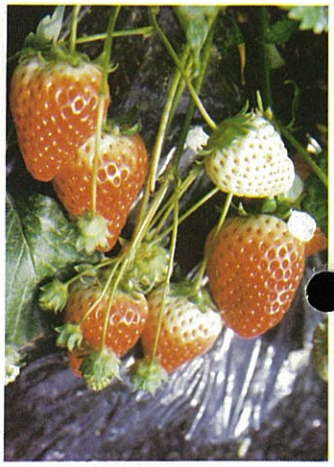
●作業
①7月、わらなど有機物約1トン/10アールと石灰窒素約100キロを全面散布して、よくすき込む。
②小畦を立て、古ビニールで全面マルチする。
③畦間に一時湛水して、ハウスを20～30日間密閉する（水量は土質、その他の条件により調節する）。

●効果
①石灰窒素や高い地温（40～58℃）で、病菌や線虫などが減殺できる。除草効果も高い。
②短期間に完熟堆肥ができ、よい土づくりができる。


キウリの生育状況

トマトの生育状況

萎黄病株


処理区のいちご

石灰窒素・農薬併用法

アブラナ科野菜の根こぶ病には、石灰窒素とPCNB粉剤の併用で、効果が発揮されます（他の病気にはクロールピクリンなどの併用も効果が出ています）。

ハクサイの根こぶ病防除　（左）無処理区（右）石灰窒素・PCNB併用区

順調に生育するキャベツ

土づくり編

1. 畑地の飼料作物の青刈りすき込み
2. 水田わらの秋すき込みと堆肥づくり
3. 桑園などの土中堆肥

飼料作物の青刈りすき込み

稲わらの秋すき込み

石灰窒素のつかいかた

●肥料として

作物	目的	石灰窒素施用量 kg/10アール
水稲	わらすきこみ・緩効・秋落防止	20～30
麦	わらすきこみ・緩効・除草	20～60
野菜	土壌消毒・連作障害防止・石灰・緩効	40～100
果樹	晩秋の土づくり・緩効・除草・ねずみよけ	40～80
桑	寒肥(12月～1月)＝土中堆肥 春肥＝除草・緩効 夏肥(夏切り後)＝除草・緩効	60～80 有機物600～1000 20～40 40～50

やりかた：植付けまたは播種の前、(暖いとき3～7日前・寒いとき7～10日前)にほどこして、土とよくまぜる。苗や種がじかに石灰窒素にふれぬように。
土が乾きすぎているときは、日数を多めにする。

●土づくり資材として

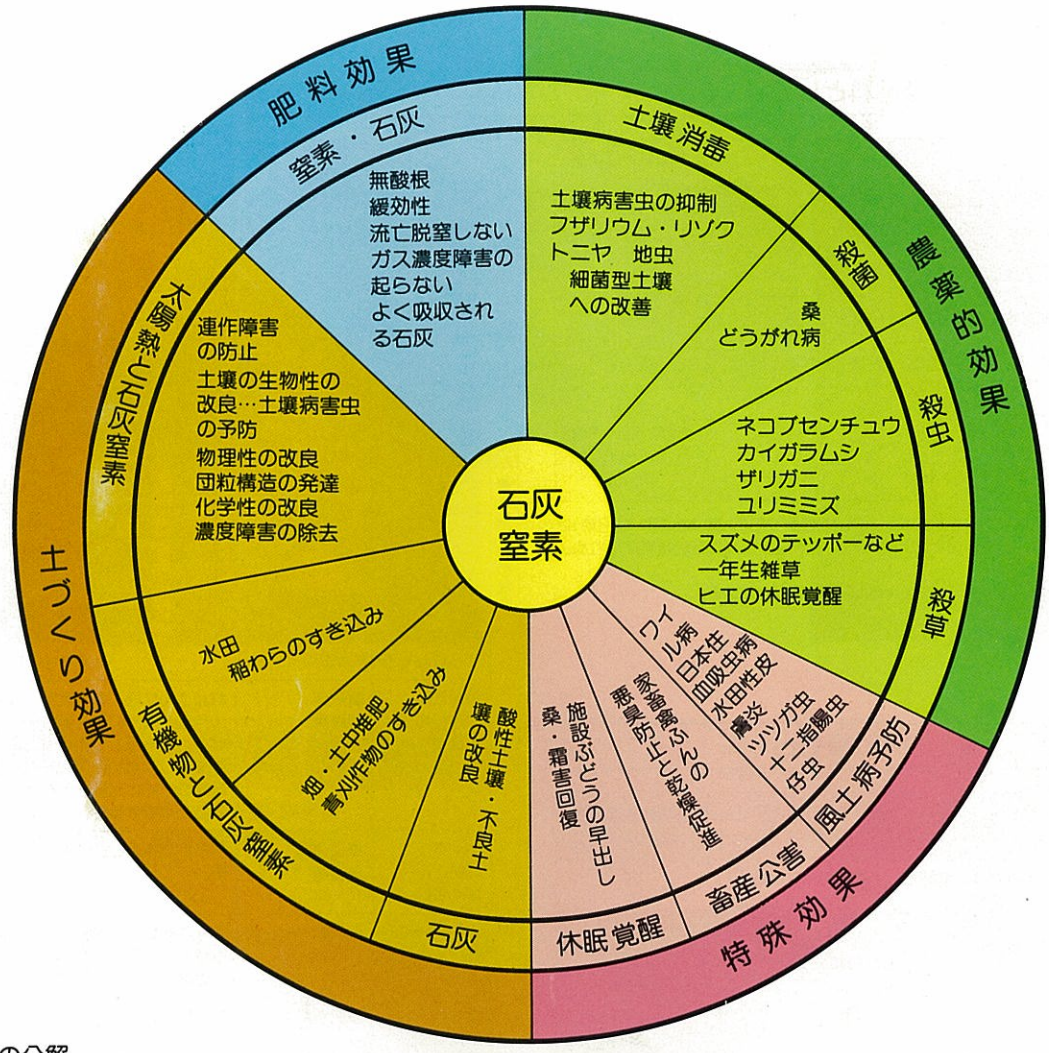
圃場	目的	やりかた	石灰窒素施用量 kg/10アール
●水田・麦畑	わらを焼かず、堆肥として土にかえす	Ⓐ秋のうちに散らしたわらの上に全面散布してすきこむ。	20
		Ⓑぬらしたわらといっしょにつみこみ、古ビニールでおおっておくと簡単に堆肥ができる。	20 わら500
●一般畑	土中堆肥や連用による効果で、土づくりをし、連作障害を防ぐ 適用作物 Ⓐトマト、きゅうり Ⓑキャベツ、たまねぎ、ほうれんそう、だいこん、きゅうり、にんじん、はくさい、レタス	Ⓐ秋のうちに、わらといっしょにすきこむ。	80～100 わら2トン
		Ⓑソルゴー、とうもろこし、青刈麦などとすきこむ。ソルゴーは7月中旬、草丈2mぐらいになったら刈倒してすきこむ。ライ麦は春すきこむ。いずれも、作付までに葉菜で1月、根菜で1月半は間をおく。	60～100
●太陽熱法(施設・露地)	石灰窒素と太陽熱を利用して土壌消毒、病害虫・雑草を防除し、完熟堆肥を早くつくる	①6～7月、わらなど有機物といっしょに全面散布して耕うん。 ②小うねを立て古ビニールで全面マルチ。 ③うね間に一時堪水。ハウスは20～30日密閉。	100～150 有機物(トン) わら　0.5～2 青刈　4～7 バーク　4～5 (一次発酵物) もみがら　0.5～1 きゅう肥 豚・鶏ふん 0.5～1 牛ふん　1～2

●農薬として

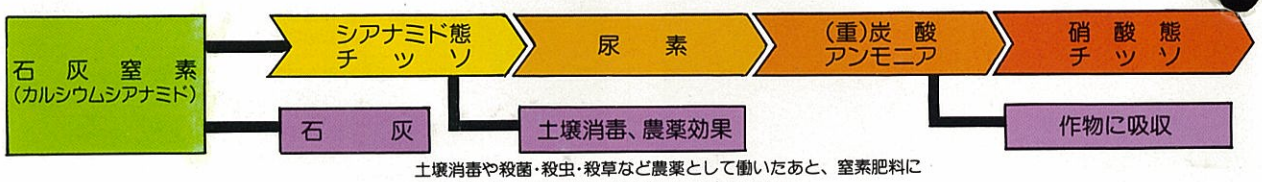
	作物	防除対象	つかいかた	石灰窒素施用量 kg/10アール
●病害虫・雑草防除の場合	水稲	ユリミミズ ザリガニ	散布して土とよくまぜる。	40～60 25～50
	畑作物	ネコブセンチュウ	散布して土とよくまぜる。	50～100
	桑	カイガラムシ 胴枯病	温湯10リットルに石灰窒素400～800gをとかし、上ずみ液を株や枝のわかれめにかける。	
	水田・畑	一年生雑草 ヒエ	耕起前に全面散布する。 初秋、水分の多い低湿田に散布。	50～70 30～50
●土壌消毒の場合	なたね きゅうり	菌核病	元肥として地表に散布して浅く土にまぜる。 なたねには、子器のできるとき、追肥をかねてやるのもよい。	60～80
	なす きゅうり ほうれんそう	立枯病	元肥として地面に散布して浅く土にまぜる。	60～80
	れんこん にんじん ごぼう	腐敗病 根腐病	れんこんには、植つけ1ヵ月前の整地のとき散布する。連作田では冬の間に散布しておくと、病害・雑草の防除と元肥をかねることができる。	100～150
	キャベツ だいこん はくさい	根こぶ病 萎黄病	散布したら土とよくまぜる。	80～100
	こんにゃく 桑 ふき	白絹病	こんにゃくでは、最後の土寄せをしたらすぐに散布。雨の直後の散布がよい。	60～100
	桑 果樹 甘藷	紫紋羽病	冬の間、石灰窒素の分解が早くないときに散布する。	60～80
	りんご	モニリヤ病	春肥として子器のできはじめに施こす。	60～80
	牧草 放牧地	マダニ	散布直後に放牧しないこと。牧草の収量が増える。	20～30
	畑作	ハリガネムシ ジムシ カブトムシ幼虫	全面散布するほか、発生源にも散布する。	60～80
	畑作	ナメクジ		20～30
	桑	シントメタマバエ	土壌中にごみなど有機物が多いと発生が多くなる。これらを早くくさらせるのにも役立つ。	60～80
●薬剤と併用の場合	はくさい キャベツなど あぶらな科の野菜	根こぶ病	定植前に散布して耕うんし、定植するときPCNBやTPNをほどこす。	80～100 PCNB 又はTPN 20～30
	ごぼう	やけ症	クロピク処理2週後に散布し、すきこむ。	100～200
●特殊な場合	家畜・家きんふんの悪臭防止と乾燥促進		舎内外に散布。	ふんの量の2%
	風土病予防		散布して土とよくまぜる。	30～50

石灰窒素の多角効果

Calcium Cyanamid



●土壌中の分解

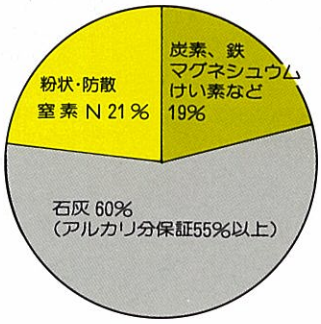


土壌消毒や殺菌・殺虫・殺草など農薬として働いたあと、窒素肥料にかわるので、農薬成分が残留する心配がありません。

●使用上の注意

- 播種または移植に当り、暖地では3～7日前、寒地では7～10日前に施して土とよく混ぜてください。
- 農薬として使うときには、肥料として窒素過多にならないよう、窒素肥料全体の使用量に注意してください。
- 散布のときは直接作物にかからないよう、とくに風の強いときには注意してください。
- 散布のときはマスク、手袋などを着用し、作業後は顔、手足など皮膚の露出部を石けんでよく洗い、うがいをしてください。また、散布後24時間以内は飲酒しないでください。
- 人畜に対する影響は通常の使用方法では少いが、誤食などのないように注意してください。
- 水産動植物に対する影響は通常の使用方法では少いが、一時に広範囲に使用する場合には十分注意してください。
- 貯蔵する場合は、吸湿性があるため乾燥した場所に密封して保管してください。

●石灰窒素の成分



防湿紙袋20kg入り

(83.8.10,000)